

理想の旋律

鞠菊

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

BLEACH×BSDの国木田×オリ主です。オリジナルストーリーを組み込みつつ小説、原作沿いになっていく予定です。更新は不定期でやっていく予定です。名前変換のない夢小説のようなものです。地雷な方はご注意ください。

クロスオーバーではありませんが出てくるキャラクターは偏っているのとそこまでBLEACHの登場人物は出てきません。またオリ主の設定に戦国無双chronicleの物が組み込まれています。主に武将名と武器の名前しか出てきませんが苦手な方はご注意ください。

異能力者が集う魔都市、横浜―。

そこには軍や警察に頼れないような危険な依頼を専門にする探偵集団。昼の世界と夜の世界を取り仕切る薄暮の武装集団、『武装探偵社』があった。

そしてその中でも特に奇怪（オカルト）な事件を担当する幽霊探偵○がいた。

「先に言っておくが探偵本人にはちゃんと足があります―。」

これは幽霊を信じていなかった理想主義者を巻き込みつつ事件解決を目指す物語―。

目次

《幽霊探偵編》

01	宵の邂逅	1
02	潜入と協力者	3
03	幽霊退治	13
04	顛末、そして	19

《幽霊探偵編》

01 宵の邂逅

その夜、国木田独歩は本日の業務を終えて夜道を歩いていた。

理想通りに業務を終了させることができたが、春にはまだ遠いこの季節は夜が来るのが早い。早く帰って明日の予定を立てよう。そう考えていた矢先であった。

国木田の目の前に女が通る。黒く短い髪。背は高く姿勢よく歩く姿が印象的であった。女はそのまま国木田に気づくことなく路地裏に入っていく。明るい昼間ならば国木田も気にはしなかったが、今は夜。しかも路地裏に女が一人などという状況は如何にも襲つてくささいと言われても仕方のない状況だ。

予定は狂うが、これから彼女に起こりうるかもしれない事象を考えれば、放っておくことなど国木田には出来ないのであった。

「おい、待てー！」

声をかけて路地裏に入るものの、女の姿はもう無かった。奥に行つてしまったのかもしれない。国木田は女に追いつくために走り出すのであった。

路地裏は薄暗いものの、月の光が情けをかけるように道を照らしていた。奥まで進むが女の姿はない、一体どこに消えてしまったのだろうか。

すると、ふいに明かりが陰る。おかしい月は出ているというのに。しかしすぐにその影は人の形をしていることに気づいた。後ろを振り返る。

「は…っ？」

それは人ではなかった。気持ちの悪い仮面をつけた化け物。国木田は瞬時にこの怪物がいつ襲い掛かってきてもいいように手帳を手取る。

しかし怪物は動かない。国木田は警戒を解かないまま怪物を見つめるが、それは動くことなく、そのまま二つに分かれる。否、切断さ

れたといったほうが正しいだろう。倒れた怪物は黒い霧をちりばめ消滅する。

一体あれは何だったのだろうか。国木田は把握しきれない現状に困惑を隠しきれなかった。そしてもう一つ驚愕した。怪物が消滅した先にいたのは、先ほど見失った女だ。中性的ではあるが整った顔つき、その華奢な両手に似合わない赤と青の双剣を手にしていた。国木田に気づかないのか、女はそのまま背を向ける。

「待て……！」

しかし女は国木田の声に耳を貸すことなくその姿をくらました。月が雲に隠れて道はすぐに闇に溶け国木田の追跡を邪魔した。

怪物、剣を持った女。あれは何だったのだろうか、俺は月に化かされたのだろうか。いやそれは酷く非現実的だ。しかし謎が解けることはない。疑問を抱いたまま国木田は帰宅するしかなかった。

同時刻、女は電話をしていた。

「うん……大丈夫。終わったから。うん、おやすみなさい。浦原さん。」
短い会話を交わし通話を終了する。そういえば、とふとあることを思い出す。

「虚の後ろに誰かいたような……気のせいかな。」

気のせいにしよう。女は一人そう呟いて夜の街を後にした。

02 潜入と協力者

奇怪な夜を過ごしてから数日後、国木田はあれから何度か同じ道を通ったが、怪物にも女にも出会うことはなかった。あれはいつたい何だったのだろうか確かめることも出来ないまま今日の業務をこなしていた。

「国木田さん、社長が呼んでいます。」

声をかけたのは、探偵社に努めている事務員だ。その言葉に返事をしたあと、すぐに社長室に入る。

そこにはこの武装探偵社の社長であり、国木田の体術の師である福沢諭吉と見慣れない壮年の男性であった。

男は白髪交じりの髪を上品に整えており、服装の蝶ネクタイが勤め人ではない別の職業に勤めていることが察せられた。男は国木田を見て「やあ。」と軽い調子で声をかけてくる。

そのあいさつに国木田は言葉ではなく礼をする形で返した。そして姿勢を戻し、そのまま社長に尋ねる。

「御歓談中に失礼します。」

「いや、かまわん。」

「それで、御用件は何でしょうか？」

「ああ、国木田。最近依頼されたK大学の大学生連続殺人事件は知っているか。」

「はい、確か昨日、探偵社に依頼されていましたよね。」

事件は数日前に遡る。K大学で一人の女子大学生の遺体が発見された。被害者は殺害された前日誰とも連絡を取っておらず、行方不明となっていた。交友関係の多い人物だったので、一日中連絡が取れなかったことを心配した家族は翌日警察に相談しようとしたその翌日に遺体として発見される。死因は失血死だが腹が食い破られておりその破れ方も獣に食いちぎられたような形だったそうだ。

最初は害獣が横浜に現れたと思ったが、その次の日に男子高校生の遺体が発見された。高校生は胸にぽっかりと大きな穴を開けて死んでいた。それだけなら女子大学生の事件とは無関係に思えたが、発見

された場所は二人とも同じK大学構内であった。そしてその男子生徒も殺される前日は行方不明となっていた。

その後も数日の間、殺され方は違うものの前日に行方不明となり翌日死体としてK大学で発見される手口がさらに二件続いた。警察はこれを連続殺人事件として捜査を進めていた。しかし進展は見込めず、評判がガタ落ちになっていくK大学は痺れを切らし探偵社に解決を求め依頼を出してきたのだが昨日のことであった。

たしか乱歩さんが別件で東北にいたので代わりに、別の調査員が派遣されているはずだと国木田は記憶していた。

「実は断られたのだ。」

「は？断られた？」

「大学側はそのような依頼をしていないと門前払いを食らった。昨日依頼に来た事務員の所在を確認したがそんな人物はいないと言われたのだ。」

「それは…大学事務員を装った差出人不明の依頼ということでしょうか？」

「そうなる。だが前金が既に支払われていた。言外にたちの悪いいたずらとも言い切れないのだ。そしてこれ以上被害者が出ることも見過ごすことはできない。」

「しかし大学構内を調査できないとなると、一体どうやって。」

「そこでだ、国木田君！」

突如、二人の会話を遮る男の声。そういえば、関係のない一般人に話していい内容ではなかったのに何故この男はここで話を聞いているのだろうか。

「潜入しないかい？手引きするから。」

「は？」

あまりにも軽い調子で言う男に福沢は呆れながら男の名前を呼んだ。

「泉、まずは自己紹介をしろ。国木田がついていけない。」

「ん？していなかったか。ははは、すまん。」

男は快活に笑う。上品な洋装には似合わない豪快な笑い方だ。す

まない、と男は笑みを浮かべたまま自己紹介を始めた。

「私は、高槻泉（たかつき いずみ）。音楽芸術家※だ。福沢とは知己でね。昔ダイナマイトとドップラー効果によるシューベルトの研究で世話になった。」

なんだそれは

「はあ…。」

「こうして今は茶を飲む仲だが、今回の事件の話を聞いてね協力できると思いここにいるのだよ。」

「協力…それが、潜入でしょうか。」

高槻は音楽芸術家と名乗った。しかしK大学は総合大学ではあるが音大でも芸大でもない、顔がきいているとは思えなかった。

そもそも一般人に事件解決の為とはいえ巻き込むことは国木田としては本意ではない。

「いやなに、正しくは協力するのは私ではないのだ。」

「では、誰が？」

「私の娘だ。」

●○○●○○

国木田は十五時丁度にK大学の校門に立っていた。協力者に会う為だ。正直気は乗っていない。先程の会話の続きを思い出した…。

—回想—

「つまり、御息女はK大学の生徒で今回の事件に近づくことが可能な人物。その方に入学見学のための手引きをしてもらう事で調査を進める、と？」

「その通り。残念ながら今進めている調査員は少々歳がいつている。潜入には不向きだ。」

「しかし、今K大学はマスコミなどの的になって周囲を警戒しています。そう上手く潜入出来るのでしょうか。」

「それはうちの娘の口次第だな。大丈夫、それなりに上手い方だから。それに君、うちの娘と同じ19歳だろう？浪人生として他の大学を見学に来た、という設定なら問題ないだろう。」

「しかし、一般人を巻き込むのは…。」

「なに、荒事には慣れてるよ。槍が降っても死なないような子だ。嘗て福沢には世話になった。その恩に娘を通してだが少しでも返したいのだよ。」

それにね、と高槻は続ける。

「恐らく解決に動こうとしなければ被害は増すばかりだろう。さすがに他人を装って静観するほど人間が出来ていないのだ。娘もいる事だしね…。」

「高槻さん…、」

「と、いうわけで！よろしく頼むよ！」

「は、はい！」

「うん、いい返事だ！」

高槻の言葉にいつの間にか素直に返事をしてしまった国木田。それを満足そうにみて高槻は笑った。その姿を見て福沢は大きくため息をついた。

「相変わらず貴殿は、人を誑しこめるのが上手だな。」

「なに、語るとみんな“はい”って納得してくれるのはいつもだしな！別に悪いことはしていない。」

「されていたら困る。」

「それじゃあ、早速で悪いが今日の昼過ぎ十五時辺りだな。そこで待ち合わせてくれ、これは私と娘の連絡先だ。」

小さな紙片を渡されると名前と電話番号、メールアドレスが書かれていた。

「応援しているよ、国木田くん。」

高槻は再度そう言って笑うのだった。

—回想終了—

何故、俺はあの時勢いに任せて返事をしてしまったのだろうか…。社長はそういう男なのだと言って諦めていた。そして巻き込むのは申し訳ないが、事件解決のことを考えればたとえ藁でもすすがるべきなのだろう。

「お待たせいたしました。」

女性にしては少し低めな声が聞こえた。振り返るとまず国木田は

驚いた。そこにいたのは数日前、国木田が見失ったあの時の女だったからだ。

「お前は……」

「……?」

何処かでお会いしましたか?」

女は不思議そうに首を傾げたが、国木田ははつきりと女の顔を覚えていた（……と思う）ので、ああと肯定した。

しかし、今追求すべきはあの時のことではない。事件の事だ。

「まあ、今はいい。俺は国木田独歩、武装探偵社勤めている。」

「そうですねか……。では、改めて、この文芸学部に所属しています。高槻紗呂（たかつき しやろ）です。話は父から聞いています。詳しい事は中で説明します。とりあえず了承してほしいこととして貴方は、浪人生で私の友人としてK大学に見学に来た人という設定です。」

「ああ、分かった。」

提示されたそれは意外と設定が薄いものであった。本当にそれで大丈夫なのだろうか。そんな不安を余所に紗呂は堂々と大学構内に入っていく。国木田はそれについて行くしかなかった。

歩きながら大学構内の説明を受ける。どうやら既に大学案内の演技は始まっているようだった。

「パンフレットを読んだと思うけど、ここは総合大学だから色んな学部はあるし、構内は広い。最初はマップを持っていないと迷子になるからそのマップは失すなよ。あと首にさげているそのIDカードは見学者の証でもあるからそれも失くさないようにな。」

友人という設定だからか、先程の敬語は無くなりフランクな口調で話しかけてくる。

確かに構内は広く、マップは少し分厚く出来ている。気になるのは4カ所についている赤い×印だ。

「それは今起きている事件の発見場所で、現在立ち入りが禁止されている場所だ。警備のせいで近づくことも出来ない。」

「警備? 警察ではないのか?」

「調べる事を調べたらすぐに周辺の調査だとか言って撤退してしまつてね。現場保存は任されているから警備をそつちに割いているらしい。」

「そうか。」

「それでもそれなりに大きい大学だから、警備は厳重。下手な関係場所を当たれば目をつけられかねない。さて、何から調べる？」

「まずは、事件についてももう少し調べたい。詳しい情報はあるか？」

「わかった。じゃあ詳しく話せるところに行こうか。ここからならラウンジが近いね。」

そうして廊下を歩いて行くと、ラウンジに着く。多くの生徒が談笑しているので少しうるさいくらいだった。

「おい、人が多いぞ。話を聞かれたら…」

「みんな自分のことに夢中で盗み聞きするような奴はそうはいないさ。とにかく座りなよ、独歩。」

「ど、独歩？」

唐突な名前呼びに戸惑いを隠せない国木田。そんな彼に対して紗呂は苦笑する。

「何驚いている。『友人』だろう？昔から名前で読んでいたじゃないか。」

「ああ、そうだったな。久々に名前で呼ばれたから。少し驚いた。」

その言葉に国木田は友人設定であつたことを思い出した。どうも調査のほうに気を取られてしまつて忘れてしまう。席に着くと色々な話が聞こえてきた。

「ねえ、あの事件進展あつたの？」

「何でも犯人はこの大学の関係者なんですつて！」

「へー、あんたじゃないでしょうねー？」

「ちよつと冗談でもやめてよね。」

「ごめんごめん。あ！ねえ、そういうえば似たような事件が昔にもあつたの知ってる？」

「え！そんなのあつたの？」

「殺されたのは此処の学生で死因は撲殺らしいんだけど、何でも死ん

だ場所が今回の最初の被害者の人と同じ場所で発見されたらしいよ！」

単なる噂話にしては興味深いことが聞こえてきた。国木田はその話にもう少し耳を傾けようとした。しかし、

「こら、お前たち何を話しているんだ。」

「あ、村上先輩。」

「こんにちはー。」

「はい、こんにちは。いくら注目の話題だからって噂話にかまけてレポート提出が出来なくなっても手伝わないからな。」

「はーい。」

女子生徒達は村上と呼ばれた男の言葉をきっかけに席を立ってしまふ。村上も女子生徒たちを見送った後、その場を後にした。

「…と、いうわけでここに来たかった理由分かったかな？」

「この噂話を聞かせるためか。」

「ああ、ついでに関係者も釣れてくれたしね。」

「関係者？」

「村上さ。そのことも含めて話そう。勿論昔に起こった事件のこともね。」

昔、とは言うが実際は三年程前の事件だ。一人の大学生の死体が発見された。場所は中庭にある花壇の傍。死因は撲殺。しかし花壇の煉瓦と頭部の傷が一致しなかったこと、足を滑らせた痕跡が見つからない事を根拠に警察は殺人事件として捜査する。だが捜査は難航。被害者の生徒が何者かに呼び出されていたという証言の元、当時の学生などを捜査対象に絞るが事件はいまだに解決されていない。

その被害者の関係者で分かっているのは三人。一人は先程、後輩に注意していた村上。被害者の友人でもあったので事件当時は犯人として疑われていたが、アリバイを証明されたため容疑者から外れた。

そして二人目は…、

「今回の事件の最初の被害者だ?!」

「うん。しかも交際関係があったらしくてね。彼女も容疑者にされたけど体格差で頭部を殴ることが出来ない事と彼女が村上のアリバイ

の証人だったんだよ。」

「…共犯の可能性はなかったのか。」

「その線も調べたけど、三人で仲が良かったらしくてね。そもそも友人関係ではあったけど明確な殺害する動機はなかった。らしいよ。」

「らしい？お前はそうは思っていないのか。」

「だってその後すぐに村上と彼女は男女の関係を持ったそうだからね。当時の状況を知っていた人からはそういうもつれで起こったんじゃないかってさ。」

ならば今回の事件も村上が関係しているのではないだろうか。そう思案した国木田は紗呂に尋ねるが、

「何やら興味深い話をしていますね、高槻君。」

しゃがれた声が会話に割って入ってきた。背を曲げて杖を手にした老人がそこにはいた。紗呂はその老人に対して頭を軽く下げた。

「こんにちは、学長先生。いえ、対した話ではありません。先程、噂話を聞いたのでそれについて少し話をしていました。」

「そうですね。いやなに、好奇心が働いてしまうのは若者の特権のような物です。仕方がない事です。しかしですね、あまり死者を冒瀆するような事をしてはなりませんよ。まあ、君ならその心配も無いとは思いますが…。」

「はい、不謹慎でした。すみません、以後気をつけます。」

「ところで、そちらの方は？見た所来客用のIDカードを首から下げているようですが…。」

学長と呼ばれた老人の視線が国木田のIDカードに向けられる。それに紗呂は軽やかに返す。

「はい、私の長年の友人、国木田独歩です。浪人生なのですが、以前から私の大学に興味があったようでした。」

独歩、この人はこのK大学の学長先生だよ。」

「国木田独歩です。よろしくお願いします。」

「それはそれは。嬉しいことですね。しかし何もこんな時期に態々足を運ぶ必要がありましたかな？」

「何分、独歩は遠くから来ているものでして。この機会を逃せば次いつ来られるか分からなかったのです。それに本人の強い要望もありまして…な、独歩?」

「あ、ああ。そう何度も横浜に訪れる程金も時間も無くてですね。」

突然話を振られるものの、何とか会話に合わせようと話す国木田。その彼の姿を見て納得したのか学長は、笑みを浮かべてそうですかと頷いた。

「いや、歳をとると疑ぐり深くていけない。思う存分、この大学を見ていってくださいね。君が入ってくるのを楽しみにしていますよ。」

「はい、ありがとうございます。」

学長はそう言った後、国木田達から離れる。杖のカツカツとした音が喧騒の中響いているのを感じた。

さて、と紗呂は先程までの話を続ける。曰く、あの人が最後の一人だと。

「何?」

「だから、あの人が最後の関係者さ。学長先生。あの人は花壇で起きた事件の被害者の父親なんだ。」

「それは…まさか、今回の事件は。」

「何かしらで関わっている可能性は否定できない。まあ、さっきのやり取り通り食えない人でね。今回の事件に対してもずっとあの調子だからね。何を考えているのか全く分からないよ。」

今持っている情報はこれだけだと、紗呂は両手のひらを見せつつ言った。これからどうするつもりなのかな、探偵さん、とも。

「現場が見たい。見られるか?」

「今は無理だよ。警備が四ヶ所とも厳重だ。特にこここの大学生はほぼ全員が容疑者の可能性があるとして下手に近づけない。」

「無理か…。」

国木田は苦々しくそう呟いたあと、紗呂の先程の発言に疑問を持つ。『今』と言ったのだこの女は。

「どういうことだ?」

紗呂は食いついた国木田を見たあと、

「それじゃあ、肝試しと洒落込もうか。」
そう笑ってみせたのだった。

03 幽霊退治

時刻は深夜23時を過ぎたころ。国木田は校門の前にいた。昼間に時間と場所を指定してきた本人は此処にはいない。一体何処に行っただろうか。

そもそも提案してきた内容が肝試しというのも意味が分からなかった。国木田は探偵社で働いているがその傍ら数学の講師としても働いている。化学、物理学も修めている。つまり根っからの理系なのである。

夜に忍び込むことの隠語であったとしてももっとほかの言い方があるはずだ。

もしかして今回の犯人は3年前死んだ男の例が復讐のため：いやそれは一番ありえないことだ。幽霊の殺人なんてものを認めてしまえば現在解決出来ない事件はすべて幽霊になってしまおうし、そもそも「国木田さん?」…!?

「その大丈夫ですか?」

心配そうに声をかけてくる。急に背後から声をかけられたことで国木田は心臓が痛くて仕方がなかったが、平静を装う。

「あ、ああ。な、なにがだ?」

「いやだって今凄く飛び上がっていたから。今も声が裏がっているし。もしかして幽霊が怖い「声など裏返っていない!!」…:そうですか。なら入ってください。」

そう言われて国木田は初めて紗呂の声のするほうに顔を向けた。紗呂はすでに構内にいた。どうやって侵入したのだろうか。

「侵入はしていませんよ。ずっと居ただけです。国木田さんが来るまで隠れていただけです。ああ、IDカードはなくても大丈夫です。警備室に入って手動の物に切り替えてあるので。」

「あ、ああ。」

手際よく国木田を招き入れた紗呂は演技をしていないからか敬語で話しかけてくる。その話し方に昼間とのギャップを感じ戸惑いながらも構内の中に入っていくのであった。

目指すは3年前と今回の事件の最初の場所。花壇だ。二人は喋ることなく目的地へ向かう。その途中、思いがけないものを発見した。それは本来ならば巡回中であろう警備員だった。国木田は慌てて警備員に近づく。

「おい！大丈夫か!!」

「…。」

「大丈夫です。気を失っているだけです。国木田さん、」
「何だ。」

「急いで花壇に向かいますよう。」

そう言って、駆け出した紗呂に慌ててついて行く。女の足にしては想像以上に早く見失わないように必死について行く。

見失う。その言葉がでてくると、ある事が国木田の頭の中をよぎった。数日前の化け物と目の前を走っている女のことだ。

あの化け物は何だったのだろうか、それを倒して見せたこの女は何者なのだろうか。そもそもなぜこの女は此処まで協力的でかつこの事件にここまで詳しいのだ。

一つ一つ疑問が浮かび上がる度に国木田は自身の足が重くなつていくのを感じた。だがそれでも、置いて行かれないように必死に足を動かす。

五分ほど走っただろうか、紗呂が急に立ち止まる。そして花壇に近くにある吹き抜けになっている廊下の柱に隠れる。

聞くのは今しかない。国木田は尋ねた。

「数日前、夜。路地裏でおまえは何をしていた。」

「…何のことですか？」

「惚けるな。俺は怪物を倒すお前を見ている。双剣をもって斬り捨てたお前の姿を。」

「それを知っていて、何故今も尚私の後について来たんですか？」

「もし、お前が犯人ならばここでおまえを止めるべきなのだろう。しかしお前が犯人である証拠はない。あるのは俺だけが目撃したあの夜の出来事だけだ。」

だからこそ、尋ねるべきだと思った。お前がここまで関わっている

その理由を。」

「…頼まれたからです。あなたが探偵として正体不明の依頼人に頼まれたように、私もまた頼まれました。」

「…誰だ。それは、」

さくり、と芝を踏む音が二人の声を遮る。二人はそつと息をひそめて花壇へ視線を向けた。そこにいたのは昼間、見かけた村上その人であった。

男の手にはスタンガンがあり、ぼそぼそと何かを呟いている。

国木田は手帳から音声録音機を作り出し、それを録音しようとする。

「助ける、俺を助ける。まただ。またあの事件が、あの男が俺の視界に耳に記憶に残っている。もう死んだのに、もういないのに、ばれなかったのに、また口を封じなくちやいけない。」

一人、相手のいない男の声に反応するのは姿の見えない鈍色の声だ。

「またかまたか。よいだろう、よいだろう。今宵は誰を殺そうか、あの噂を聞いていた女子達か？楽しいのう、楽しいのう。」

「もう噂をしないよう噂をする奴は全員だ。今頃事件を気にするあの女も、女が殺される瞬間を見たあのガキも。俺を疑う奴も、事件を追いかける正義感を振りかざす偽善者も、全てだ!!」

村上は叫び、目を血走らせると廊下を睨み付けた。目が合った。その時黒い腕がこちらに向かってくるのが分かった。

「まずはお前たちからだ!!野鼠いいつつ!!」

廊下の柱が一瞬にして崩れる。必然的に庭に出た二人は、村上とその後ろにいる白い仮面をつけた怪物を見る。それは形が違うものの国木田が見たあの夜の怪物と似たような姿をしていた。

白い骸骨の面と相対するような黒い両腕。足がない代わりにその長い腕が巨体を支えていた。

紗呂が服に付いた埃を払い落とす。その冷静な様に村上は腹立たしいのか声を荒げる。

「お前は誰だ!?何でここにいる!俺の邪魔をするのか?いや、違う。」

違う違う違う!!これは正しいことだ!俺は救われなくちゃならない!!俺は正しい存在でなくてはならない!だからこそ、俺はあいつを殺したんだ!俺の方があいつより上だ、上でなくちゃいけない!!成績も地位も女でさえ!!」

村上は正気ではない。口から泡を吐きながら叫び続けるとそのまま倒れた。気絶したようだ。御高説どうも。皮肉ったような声が紗呂の口から洩れたのが聞こえる。怪物がこちらを見て笑った。

「んん?見たことあるぞ?お前を見たことがあるぞ、あるぞ。そうだ最近聞いた話だ。『死神』でもないただの人間がわれらの同胞を狩っているとか。お前か?お前か?」

「二回も繰り返すな、うつとうしい。人間の言いなりになっている虚が偉そうにほざくな。」

「なに、エサに困らん為には効率のいい狩場が必要であろう。あの男の指示に従うのは少し癪ではあるがなに些末なこと。些末なこと。さてそれでは、良質な霊圧二匹いただこうかあ!!」

「っ!来るぞ!!」

巨体が腕をこちらに伸ばす。それを後ろに下がることで、避ける。地響きが聞こえると怪物が手を伸ばした先は小さなクレーターとなっていた。規格外のその怪力にぞつとする国木田。しかしただ避けるだけではない。国木田は手帳に書き込む。

「独歩吟客『自動拳銃』」

千切られた手帳の紙片が自動銃に変化すると、そのまま銃弾を怪物に打ち込む。銃弾は当たり血液のようなものが吹き出るが怪物は物ともしていかない。怪物は国木田の方へ向き腕を伸ばす。腕が国木田を捕まえる。

はずだった。

ゴトリ、長い片腕は地に落ちた。綺麗に切断されているそれは黒い霧となって消えていく。怪物は悲鳴こそ上げないものの苦しもうめき声をあげた。

「ぐうっ!」

『式天伊邪那美』

冷徹な声が響いた。血がまとわりついている双剣。

「虚、狙う相手が違うんじゃないか？」

そう言うのと紗呂は怪物を虚と呼ぶと駆け出した。虚は片腕で己の体を支えている。動けない代わりに口から舌を伸ばす。真つ直ぐ繰り出されるそれに怯むことなく体を捻ることで躲すと、虚本体へ近づき一閃する。

双剣から繰り出される斬撃が虚の仮面を傷つけるが浅かったのかそれが割れることはない。

もう一度、振りかざす。ことは出来なかった。

息が詰まり、その後強制的に吐き出される。身体を圧迫するそれは虚の腕だ。二本の腕が紗呂の体をつかんでその体をつぶそうとしている。両手にあつた双剣は衝撃で手放してしまった。

「ふはは、死ぬがいい！矮小な人間め！死ぬがいい！」

「…このっ！」

もがくが、力が緩むことはない。それどころかますます強くなるそれにどうにか対抗しようともがき続ける。その時、

「独歩吟客『閃光弾』！」

その声と共に、閃光が辺りを包む。虚はその眩しさに一瞬緩む。

今だー、

その隙をついて両腕から抜け出した紗呂は足元にしゃがむ。

虚は逃げた獲物が再び剣を取ることを瞬時に悟ると二本の腕を伸ばす。今度こそ、逃がしはしないと。

一呼吸、それで十分だった。

『『獄焔火具土』』

ガチャリ。鉄の音だ。重厚なその音は先程国木田が虚に向けていた自動銃よりも大きい。それは虚の鼻先、否。仮面の先に突き付けられていた。

閉じられていた瞳が開眼される。闇より深いその黒が自身の終わりを悟らせる。ああ、もつともつと、

銃声が響く。

仮面は砕け、その巨体を崩し倒れる。黒い霧が空に還る。終わっ

た。まず国木田が理解したのはそれであった。

時代にそぐわない短剣が装着されている火縄銃を肩に担いでいる女。攻撃を受けたためか少し服が汚れ怪我也も負っているが立ち姿はあの日見た夜と同じように凜としていた。

紗呂は国木田を見ようとする。

「ありがとう。助かった。」

閃光弾の名残か国木田がいない方向へ視線を向けてくる。

こっちだ。声をかける。

すると今度は声の聞こえる方へ視線をきっちり向けてくる。

「ありがとう。おかげで虚は退治できたし、村上は捕まえられた。もう事件が起きることはない。」

「いや、すべきことをしたまでだ。俺こそ足を引つ張った。すまなかつた。」

「いや虚のことをまともに話さなかつた私も悪い…ですよ？」

話しているうちに取って付けたような敬語で話し始める。気が抜ける。国木田は苦笑しながら、敬語はいらない。と答えた。

「今更だ。話安いのが一番だろう。」

「そっか。わかつた。」

…さてと、全く配慮して戦わなかつたけど、村上はどこだ？」

視界がようやく戻ってきたのか、ゆっくり辺りを見回すと砂埃を被っているが怪我をせず氣を失っている村上がいた。

悪運が強いな、この男は。はははと笑いながら言う紗呂。快活なその笑い方に彼女の父親を重ねる。げんなりしつつも、手伝えと言いなから手帳から縄を取り出し縛り上げる。

その後警備の人間の手当てや、軍系の連絡を入れ果てには大学へ侵入したことへの謝罪と事件の顛末の報告等々をこなし、氣づいたら夜が明けておりその間に二人はまるで昔からの友人のように「紗呂」「独歩」と呼ぶようになっていた。

04 顛末、そして

国木田は事件収束の翌日。つまり夜が明けたのち直ぐに報告書の作成を行っていた。K大学連続殺人事件報告書。簡潔にまとめると以下のとおりである。

全ての事件の発端は、3年前の同時期に起きた一人の大学生の殺人事件であった。犯人は被害者の友人で会った村上。村上は自分より一歩先に行く被害者が妬ましく、また被害者の恋人で会った女性に横恋慕していた。

劣等感と嫉妬にかられた村上は被害者を殺害。女性を脅し、アリバイの偽造と証拠の隠ぺいを携わらせた。その後、その事実をネタに女性を脅し恋人にするが三年が経ち、女性が罪の意識と村上の横暴さに堪えられなくなり警察に駆け込もうとした男が女性を殺害。これが第一の被害者であった

皮肉にも殺害場所は以前殺した被害者と同じ場所であった。犯行がばれる前に死体を隠そうとしたところに仮面の化け物、虚が現れ女の半身を食べた。虚は村上に取引を持ち掛けた。村上は消してほしい人間を虚の餌にすることで取引に応じる。

その姿を偶然にも見かけたのが第二の被害者であった高校生である。その後も目をかけて事件に直接、あるいは間接的に関わったものを殺害し続けた。(ここまで虚と書かれているところが黒く塗りつぶされている。)

事件収束後、軍警に引き渡された村上から事情聴取を取るものと言っていることが支離滅裂なところもあるため、現在は精神病棟で強制入院させられている。意識が正常になり次第、改めて逮捕する予定。

尚、医師の判断によると回復の兆しは見られないらしい。

そして国木田は次の文を付け加えた。

結局、今回の依頼主の正体は不明のままであった。また事件解決のためとはいえ部外者を不法侵入させたK大学学生である高槻紗呂は停学こそ免れたものの。



学長室―。

そこには対象の紙束を山のように積み上げて作業をする生徒がいた。徹夜明けで一睡もしていない目を無理やり広げながらペンを走らせている。紗呂だ。せめてもの慈悲で浴びることが出来たシャワーで濡れた髪がぼたりと、反省文を濡らした。

「若い時には無茶など当たり前だと思っていましたよ、まさかここまで活躍されるとは思いませんでしたよ、高槻君。」

「…嫌味ですかね？学長先生。」

「まさか。君たちのおかげで犯人は逮捕。事件は終結しました。たとえ見学者と偽って依頼していかないはずの探偵社の人間が大学を無断で調査したり？深夜に構内に不法侵入したり？中庭と廊下と花壇を滅茶苦茶に壊しても、君たちの活躍を考えれば取るに足らない事でしょう。」

笑いながら学長は言う。紗呂も笑いながら（内心は、この狸爺と思いつつ。）一枚一文字で反省文を書き始めた。

「反」「省」「し」「て」「い」「ま」「す」。

やがて適当に書き進めたまま紗呂は学長に尋ねた。

「謎の依頼人は貴方でしょうか？どうして彼処まで面倒な真似を？」

「何故だと思う？」

「否定はしないんですね…。」

推測ですが、犯人…村上に悟らせたくなかった。と、思っています。
が。」

「うん、それもあるけどね。私は虚が息子だと思っていた。」

「…！」
怨恨で嘗ての恋人を殺し、次に狙っていたのが村上。やがては無差別に人を襲い始めていた。そう思ってしまった。

「そう思ったらいつの間にか私は、依頼はしていないと口走っていた。あれが息子なら息子は無念を晴らそうとしているのではないのかと。でもそう思う反面、やはり人を殺すというのは許されない事だ。」

だから、学長は依頼料を既に払っていた。怪しい痕跡を残せばそれ

を理由に探偵社は調べると分かっていたから。

しかし真実は違った。虚はただ餌場を探していた小賢しい悪霊で、村上はその悪霊と手を組み、罪を犯していた。

「私の本当の依頼人は探偵社ではありません。勿論、手引きの話を持ちかけた養父でも。」

息子さんです。学長先生、貴方の。」

その言葉に学長は驚愕した顔を浮かべた後、ゆっくりと項垂れた。ポソリと呟く。

「それは…、そうか。そうだったのか。」

「彼はこれ以上友人が罪を犯さないことを願い私に頼り、私はそれに応じました。」

「何処までもあいつというやつは…。」

そのまま学長は黙り込む。紗呂は反省文を書き込み続けた。静寂が包み込みやがては静かな雫の降る音が聞こえる。それでもペンを動かす手は止めない。

ありがとうー。

気配が消える。

紗呂はその声にどういたしましてと小さく呟いた。

●○●○●○●○

事件収束から数日後、紗呂は一軒の建物の前に立っていた。表の看板に書いてある文字は「武装探偵社」

紗呂がここに居るのは、ある一本の電話がきっかけだった。

「聞きたいことがある。」

国木田のその言葉に、全てを話していない事を思い出した紗呂は自然と探偵社へ足を運ばせていたのだ。

四階に上がり、事務所の中に入る。すると、蝶の髪飾りをつけたおかつぱの美女に話しかけられた。

「おや、アンタが噂の人物かい?。」

「噂の?。」

「ああ、コッチの話さ。気にしないでくれ。さあ、国木田と社長が中で待ってる。入んな。」

そう促されるままに案内された社長室に入る。そこには先程の美女の話の通りに着物を着た貫禄のある男性が座っていた。国木田はその男性の後ろに立っていた。

「待っていた。其処に座りなさい。」

「は、はい。」

静かだが、刀のような鋭さを持つその雰囲気と声にのまれ勧められるがままに目の前のソファに座った。

「私はこの武装探偵社の社長をしている、福沢諭吉だ。」

泉とは知己でな。今回の事件は君のお陰で解決した。そして一般人である貴殿を危険なことに巻き込んだ事誠に申し訳なかった。」

唐突の謝罪。国木田も後ろで頭を下げており紗呂は慌ててそれを止めた。

「やめて下さい。そもそも私の方から首を突っ込んだのです。むしろ、どつ…、国木田さんには助けてもらい私の方こそ謝罪をしなければなりません。」

虚の事キチンと説明せずに事件に関わらせた事申し訳ありませんでした。」

「その事についてもお尋ねしたい。虚とは何だ。そして、それを倒した貴殿の能力も含めて。」

「はい。分かりました。」

虚とは何らかの理由で堕ちた人の魂である。そして人間の魂を食べる悪霊であり、生死問わず人の魂を襲う。

それを退治する力、霊能力を四年前に虚に襲われた事がきっかけで手に入れた。以来、虚を退治するようになった。

「手に入れたのは偶然に等しいものですが、私は今自分の意思で戦っています。」

「…何故、戦う。力を持っているからか？」

「力が手に入るまで、私は守られていました。」

脳裏に浮かんだのは、金色。暖かく優しいのに、近づけない眩しさを持つ彼の人。

「もう、守られているだけは嫌でした。口先だけの人間ではいたくな

かった。力があるなら私が守られた分、誰かを守るべきだと。そう、思いました。」

私が本当に守りたかった人達は、守られてくれない人達だった。だからせめて、酷いと叫びたいくらいに優しいその人達が守りたいものを守りたかった。

たとえこの思いが、高潔なそれとはかけ離れているものであったとしても。

「だから、戦い続けます。剣と銃が握れなくなるその日まで。私は私の手が届く限り守りたいです。」

「そうか。」

優しい顔を浮かべている。紗呂もまた微笑んでいた。

「高槻紗呂。」

「…？は、はい。」

「その志、この探偵社で生かしてみる気はないか？」

「…!!」

突然の誘いに驚きを隠せない紗呂。国木田も聞かされていなかったのか驚いていた。社長は構わず続ける。

「ここで人々を守り、救う気はないか。」

その言葉に悩む理由など無かった。

「はい。私にそれが出来るなら…私は守り、救いたいです。」

「…改めて武装探偵社、社長の福沢諭吉だ。これからよろしく頼む。」

「高槻紗呂です。特技は幽霊が見えて、触れて、喋れることです。これからよろしくお願ひします。」

こうして、武装探偵社に新たな仲間が加入したのであった。

●○○●●○○○

その夜。紗呂は自宅のソファに腰掛けていた。

自宅、といっても実家ではない。養父が気まぐれで作るいくつかのアトリエ。ここはその一つだ。横浜の大学に通うことが決まった時、鍵を渡された。

「機嫌が良いな。そんなに嬉しいか。」

高くも低くもない不思議な声が聞こえる。しかしその声に戸惑う

ことなく紗呂は答える。

「ずっとこんな日を待っていたのかも知れない。独りよがりの戦いから本当の意味で誰かを救うために剣を握れる。あの最後の戦いの後私は逃げてばかりいたから。正しく力を振るえる場所が欲しかったんだ。きつと。」

“私のことを喋らず隠したのにか？”

「隠した…そうだな。そうかもしれない。話せばきつとあの人達の事だ。力になろうとするだろう。」

そう言つて紗呂は自らの左腕を掲げる。そこには蛇の鱗の様な痣が左腕を覆う様にあつた。

「お前は一体何なんだ、白蛇。」

“私は加護であり、呪い。お前の願いを叶えお前の大切なものを喰らう存在。”

紗呂はその言葉を聞いて目を閉じ、その言葉を頭の中で繰り返す。

左腕がじくじくと痛みを訴えた気がした。